

益富資料の目録編成について

鈴木 文

はじめに

益富資料⁽¹⁾とは、平戸藩領の生月島（現、長崎県平戸市生月町）を拠点として鯨組を営んでいた益富家に伝来した資料群である。内容は、近世中期から明治期にかけて益富家が営んでいた捕鯨業に関する資料群がその大半を占める。

生月島は、平戸島の北西に位置し、東西約三キロ、南北約一〇キロの南北に長い地形で、いわゆる「かくれキリシタン」信仰の文化を継承している島としても知られる。生月島を拠点とする益富組は、近世中期から明治初期に至るまで鯨組の経営を行った。益富組の経営は、「鯨組の組織の規模が当時のいかなる産業の規模をもはるかに上廻っていたことは明らか」と言われるほど大規模であった。益富組は、大坂や長崎のみならず赤間ヶ関（下関）・熊本・福岡などに鯨商品の販路を持つており、その利益によつて生じる運上銀は平戸藩の財政を潤した。なお、生月町壱部浦に伝存する益富家の居宅は、「鯨組主益富家居宅跡」として長崎県の史跡に指定されている。⁽³⁾

当館では、益富家から資料をお預りし、資料の公開に向けた整理作業を継続してきた。その内、データを作成した「三五五点」⁽⁴⁾について、令和三年度より「福岡市総合図書館古文書資料収蔵品データベース」による公開を開始した。公開した資料は、当館二階の文書資料室においてマイクロフィルムによって閲覧に供しており、今後も順次資料を公開していく予定である。

そこで本稿では、益富資料の解説として、以下の四点についてまとめる」ととて、益富組に関する研究には、まず秀村選三氏による一連の研究がある。⁽⁵⁾秀村氏は、「所々組方永代記」などの益富資料の翻刻を多数行うと共に、益富組の雇用労働関係を明らかにした。また、「先祖書 控」（資料番号一九五六）の分析によつて、

する。第一に、これまで蓄積されてきた益富資料の分析に基づく研究成果の整理を行う。⁽⁶⁾第二にそれらの研究史によりながら益富家の捕鯨業経営について概観する。第三に、益富組の捕鯨業経営の中でも、特に福岡藩と益富組の関係について詳述する。第四に、上記の研究を踏まえ、令和三年度より当館で公開を開始した資料の目録編成について、アーカイブ論の観点から解説を試みる。

1 益富資料に関する研究動向

益富資料は、単に捕鯨史研究に留まらず、捕鯨業を営む経営の歴史という観点から、広く経済史の分野で注目されてきた。特に、益富組を含む多数の鯨組が壱岐・対馬・五島列島から北部九州沿岸に広がる海域で大規模に操業を展開した「西海捕鯨業」に関する研究の層は厚いが、紙幅の関係上、本章ではあくまでも益富資料と益富組に関する研究史に限定して整理したい。

生月島の益富家に膨大な量の資料が伝来していることが秀村選三氏によつて発見されたのは、昭和二三年（一九四八）のことである。⁽⁶⁾その後、秀村選三氏を始めとして、藤本隆士氏・武野要子氏・松下志朗氏など多くの研究者によつて益富資料の調査・研究が進められた。

益富組に関する研究には、まず秀村選三氏による一連の研究がある。⁽⁵⁾秀村氏は、「所々組方永代記」などの益富資料の翻刻を多数行うと共に、益富組の雇用労働

享保期の益富組の創業から安永期頃までの操業の経緯を実証した。⁽⁸⁾

一九五〇年代から六〇年代に書かれた益富組に関する研究として特筆すべきは、小葉田淳氏、服部一馬氏、及び牧川鷹之祐氏の研究である。小葉田氏は、平戸に残された捕鯨に関する資料を調査・分析するにあたって、益富組の他、平戸で突組として活動した「吉村組」の事例を検討している。益富資料を引用して益富組の活動を明らかにした初期の研究として注目される。⁽⁹⁾ 服部氏は、寛政期に益富組の羽指が捕鯨業開始の可否を判断する視察のためにエトロフへ派遣されたことを明らかにしている。牧川氏は、西海捕鯨業を概観する中で益富組と『勇魚取絵詞』（後述）にも触れており、特にシーボルトと益富又左衛門・正弘との会見について言及している点は注目に値する。⁽¹⁰⁾

益富組の研究は、同組の経営に関する論考を多数発表した藤本隆士氏によつてさらに深化した。⁽¹¹⁾ 藤本氏は、益富資料を分析することで、益富組が平戸藩のみならず諸藩及び各地の諸商人から幅広く資金調達を行つていたことを実証した。また、益富資料に残された伝記や系譜類の分析によって益富家の詳細な系図を完成させ、益富家が別家である山県家・豊屋家と共に「同族団経営」によって広範な経営活動を行つていたことを明らかにした。さらに、藤本氏による益富資料の分析は、近世の地方市場における流通や貨幣経済に関する研究にも寄与した。藤本氏は、福岡藩を事例として、益富組の鯨油流通ルートを明らかにすると共に、益富資料の経営帳簿である算用帳の分析によつて、「匁錢」が西国に広く流通していたことを明らかにした。その他、益富組の捕鯨活動を描いていてことで著名な出版物である『勇魚取絵詞』（いさなどりえことば）の出版の経緯についても分析を行つている。藤本氏は、平戸藩九代藩主松浦清（静山）及び一〇代藩主廬⁽¹²⁾ と国文學者小山田与清との交流が『勇魚取絵詞』出版の背景にあつたこと、さらに益富家が主体的に出版に関わった事実を明らかにした。⁽¹³⁾

益富組の経営に関する研究は、壱岐小納屋の事例を実証した武野要子氏によつてさらに進められた。武野氏は、壱岐小納屋の「経営体」としての側面に着目し、益富組主と壱岐小納屋との間に「一種の請け負い制が存在」したことを指摘し

⁽¹⁴⁾ こうした藤本氏・武野氏の研究を受けて、島巣京一氏は壱岐小納屋を事例に益富組の経営構造を提示すると共に、藤本氏が着目した「算用帳」について、その記録管理と経営上の意義を指摘した。⁽¹⁵⁾

このように益富組の経営とそれに付随する流通や貨幣に関する研究が重ねられる一方で、益富組の運上銀に関する先駆的な研究も発表された。松下志朗氏は、寛政期（一七八九～一八〇二）に本年貢以外の「運上銀」が重視され始めた平戸藩において益富組の莫大な運上銀が重要な位置を占めたこと、さらにはこの運上銀が「先納銀」として定額化し、やがて益富組の経営を圧迫していくことを明らかにした。

こうした研究動向を受けて、益富組の研究をさらに発展させたのが末田智樹氏⁽¹⁶⁾ と古賀康士氏⁽¹⁷⁾ である。

末田氏は、益富組が藩の領域を越えて捕鯨業を展開したことを「藩際捕鯨業」と位置づけ、大村藩領内の江島における益富組の活動を明らかにした。さらに、五島藩黄島における別当屋の役割を分析することで、益富組の経営における別当屋の重要性を実証した。これらの実証を踏まえつつ、益富資料に伝來した「割」資料の分析により、益富組の生産組織の構造を図式化して提示した。末田氏はさらに天明期から天保期に至る益富資料の運上銀に関する資料を翻刻して分析することによつて、益富組の運上銀の実態を明らかにした。

古賀氏は、益富組について特に壱岐小納屋を中心に分析を行つてている。先述の武野氏・島巣氏の壱岐小納屋に関する研究を批判的に継承し、経営体としての小納屋の位置づけを行つた。具体的には、印通寺浦辻川家に伝來した資料群を使用して小納屋の会計分析を行うことで、小納屋の共同出資の実態を明らかにし、これまで大納屋からの委託・請負を行うものとして捉えられていた小納屋について、独立した経営体であることを実証した。さらにこれまで鯨油のみに焦点が当てられてきた流通について、鯨肉の「浜売り（現地販売）」と「積出し（北部九州や下関の問屋への輸送販売）」の流通を分析することで、小納屋の販売行動を明らかにした。

また、中園成生氏は主に漁業史・地域史の観点から日本捕鯨史全体の中に益富組の捕鯨業を位置付けた。⁽²⁰⁾ 中園氏は、捕鯨の時代区分では「網掛突取法」が導入された「古式捕鯨業時代の中期」に益富組が活動を展開したことを明らかにしている。さらに令和二年度に平戸市生月町博物館・島の館で開催されたシンポジウム「古式捕鯨とは何か」（後述）において、中園氏は古式捕鯨業研究には幅広い可能性があることを指摘している。具体的には、鯨組の捕鯨業の経営（雇用形態を含む）・流通・海産資源（鮫油や鯨肉を含む鯨商品）の活用・鯨食文化などの他に、捕鯨業によって蓄積された資金の投資の在り方についても明らかにすることができると述べ、益富組が生月島の白山宮の社殿や住吉宮の鳥居などの建設に出资したことなど、インフラ整備や文化貢献にも寄与していたことを指摘している。また、『勇魚取絵詞』の詳細な内容分析によって益富組の生産活動の流れを明らかにしている。⁽²¹⁾

同じく『勇魚取絵詞』については、森弘子氏・宮崎克則氏によつて版行の具体的な経緯を分析した研究もある。⁽²²⁾ さらに近年では、森・宮崎両氏によつて、益富組と地域漁業との軋轢の存在を指摘する研究も発表されている。⁽²³⁾ 両氏は、益富組の大納屋からの出島の浦役人へ出された書状を分析することによって、的山大島の一般漁民と益富鯨組との間に漁場をめぐる軋轢があつたことを指している。古賀氏の研究においても指摘されていたように、⁽²⁴⁾ 益富組の研究は、鯨組そのものの諸活動の分析を超えて、地域社会への影響を考察する段階にまで至つている。

令和二年度には、平戸市生月町博物館・島の館において「古式捕鯨とは何か」をテーマにシンポジウムが開かれ、紀州熊野の事例や呼子・小川島の事例と共に、土肥組や益富組の捕鯨業経営に関する報告がなされた。⁽²⁵⁾ 益富組に関わる報告としては、中園成生氏の「現地報告 古式捕鯨の研究から見えてくるもの」、古賀康士氏の「古式捕鯨を支えた人々—納屋場の比較を通じて—」、末田智樹氏の「平戸藩益富又左衛門組の経営発展と巨大鯨組の取揚鯨」の各報告が行われると共に、パネルディスカッションにおいても活発な議論が交わされた。特に鯨組の経

営組織における「小納屋」の位置づけについて、末田氏及び古賀氏によつて議論がなさるとともに、末田氏から益富組の「豊屋売場」の実態解明の必要性が指摘された。また、「同族団経営」と「能力主義」を併せ持つた益富組経営の在り方、幕末に鯨の捕獲数が激減する要因など様々な研究課題が提示された。このような研究課題を解明するためにも、益富資料の公開の重要性が再認識された。

2 益富組と捕鯨業経営

(1) 益富組の「同族団」と平戸藩

益富組は、組主である益富家を中心には別家である山県家（県家）及び豊臣家との姻戚関係に基づく「同族団経営」を行つていた。⁽²⁶⁾

益富家の先祖は甲斐の武田氏の家臣山県氏であり、武田氏滅⁽²⁷⁾後に平戸へ移り、豊屋の商売をしていたと伝えられている。⁽²⁸⁾ 益富家は、「益富」姓を平戸藩より賜る以前には「豊屋」を名乗っていた。初代又左衛門正勝は、享保期に鯨組を操業した人物である。正勝の従弟の佐助が養子に入り正美津を名乗つたが、早世したため家督は継がず、正美津の嫡男又之助が二代又左衛門正康となつた。正康は別家として山県六郎兵衛となり山県姓となつた（後述）ため、本家の家督は弟の三代又左衛門正昭が継いだ。以下、益富本家の歴代当主は、四代又左衛門正真・五代又左衛門正弘・六代又左衛門正敬・七代又之助正惠と続き、明治期に至つた。

嘉永二年（一八四九）に作成された「先祖書記」（資料番号一九五六）によれば、

初代又左衛門正勝は享保一九年（一七三四）に平戸藩から五人扶持を賜り、寛保二年（一七四二）に「益富」の姓を賜つた後、延享四年（一七四七）には二十人扶持に加増されたと記されている。同資料には元文五年（一七四〇）に平戸藩王による生月での捕鯨の上覽が行われたことも記されており、平戸藩が益富組を優遇する措置を取つていたことが分かる。その背景には益富組が上納する多額の浦請銀・運上銀があつた。⁽²⁹⁾ さらに同資料には、寛延二年の正勝死去後も、二代又左衛門正康が宝曆二年（一七六二）に五人扶持を賜つた後、明和七年（一七七〇）

にかけて増加を受け、明和八年に「御馬廻」となって四拾人扶持となり、「山県」を名乗つて士分となつたことが記されている。

山県家は、本家の二代正康が別家して、山県六郎兵衛を名乗つたことから始まる。同じく四代益富又左衛門正真も別家して初代山県三郎太夫を名乗つた。山県三郎太夫家は、二代三郎太夫正明が継いだが、正明は後に「初代益富波右衛門」となり、正明の養子であった正敵が三代三郎太夫となつた。なお、正明の嫡男亀太郎は、後に本家六代益富又左衛門正敬となつており、正明の弟正方の養子忠二郎は、後に本家七代益富又之助となつている。このように、山県三郎太夫家は、本家と密接な関係を保つていた。これらの山県家は平戸藩に仕官し、代々藩士として藩側と繋がりを持つことによつて益富組の経営の一翼を担つた。

また、益富本家から分家した、別家としての「畠屋家」は、初代益富又左衛門正勝の叔父に当たる畠屋三郎兵衛家より始まる。畠屋三郎兵衛は、兄景正の死後正勝とその母を養い、正勝の鯨組創業を支えた。その後畠屋家は多くの分家・孫分家・曾孫分家を生み出しながら鯨組の操業に直接携わることによつて、本家・山県家と共に益富組の経営を担つた。特筆すべきは娘婿が興した別家である

畠屋勢右衛門家である。畠屋勢右衛門は、福岡大学にマイクロフィルムが所蔵されている「山県家文書」で確認することができるのである人物であり、益富組の大別当として経営に深く関わつた。⁽³¹⁾

(2) 益富組の捕鯨業経営

① 近世後期から明治初期の益富組捕鯨業の概観

益富組本家の初代である又左衛門正勝は、妻の父である田中長太夫と共に享保期に鮪定置網（大敷網）漁を開拓した後、享保一〇年（一七二五）に田中長太夫と最合（共同事業）で捕鯨業を開始した。⁽³²⁾ この時の鯨組は生月の館浦を拠点とした「突組」（突取捕鯨法で捕鯨を行つ鯨組のこと）であったが、不漁が続いたため田中長太夫が最合を解消した。単独で鯨組を継続することとなつた正勝は、享

保一四年に拠点を生月の御崎浦へ移し、同一八年に突組から「網組」（網掛突取法で捕鯨を行う鯨組のこと）に転換した。また、壱岐の沖合羽指吉左衛門を御崎組の沖合羽指であつた左次兵衛と入れ替えた。これらの転換が功を奏し、益富組の捕獲高は享保期から元文期にかけて飛躍的に増加した。間に増減はあるものの、享保一〇～二一年段階の捕獲数三本から、元文四～五年には五一本にまで増加している。⁽³³⁾

益富組は、全盛期には約三千人を越える規模の労働者が働いていたと言われており、文化一四年（一八一七）の長者番付に益富家が名を連ねるほどの利潤を生み出す一大産業となつた。⁽³⁴⁾ しかし、弘化期（一八四四～一八四七）頃から不漁に苦しむようになり、嘉永期（一八四八～一八五三）には経営不振に陥つた。その背景には欧米の捕鯨船による鯨の大量捕獲があつたと言われている。益富組は、万延元年（一八六〇）にいったん休業となり、明治初期に再度操業を試みるも、明治七年には完全に廃業することとなつた。

② 益富組の組織構造

西海捕鯨業は、「北部九州の沿岸の村々や島嶼部の島々の主要な産業」であり、「人類史から見ても、人力による沿岸捕鯨として史上最大規模」だったと言われている。⁽³⁵⁾ このような状況で大規模な経営を展開していた益富組は、多くの人員を動員した精緻な組織によつて運営されていた。⁽³⁶⁾

益富組に限らず、一般的に西海捕鯨における鯨組の組織は「沖場」と「納屋場」の二部門に大別される。沖場とは、海に出て漁場で鯨の捕獲を行う部門である。納屋場とは、出漁前の道具類作成や捕獲鯨の解体・加工などの陸上作業を行うと共に、經營管理機能を併せ持つ部門である。

沖場には羽指（はざし）・友押（舩押）・加子（水夫・水主）が所属した。羽指は各船を指揮する役割を担つた。友押は、船尾の艤装を漕ぐ船頭で、櫓を漕ぐ加子達を統率すると共に、羽指を補佐する役目も果たしていた。捕鯨には勢子船（鯨を網に追い立てて鉛を打つ役割を担う）・双海船（そうちかいぶね・鯨網をかけ

る役割を担う・持双船（もつそうぶね・鉛が打たれた鯨を運ぶ役割を担う）が使用された。

納屋場には、「大納屋」と「小納屋」があり、大納屋は鯨肉としての価値が高い尾羽毛（おばけ・おばいけ・おばいき）や油がよく取れる部位、さらに商品価値の高い髭などを加工していた。一方小納屋は頭（かばち）・立羽（たつぱ）・臍腸類などを加工していた。大納屋と小納屋は年間契約の形をとつており、小納屋も「経営体」として機能していた。⁽³⁸⁾

『勇魚取絵詞』によれば、益富御崎組の納屋場には、網納屋・鍛冶網大工樽等納屋・赤身納屋・東蔵尾羽毛藏・筋納屋・革蔵・塩蔵・大納屋・油壺場・小納屋・小納屋藏・骨納屋・勘定納屋・大工納屋・道具納屋・米倉・新筋蔵・舡納屋・油貯小倉・油貯六間倉・荒物貯八間倉・羽指納屋・加子納屋があると記されている。⁽³⁹⁾末田氏の分析によれば、納屋場には支配人である「大別当・別當」の下に「若衆・帳役・茶廻・勘定納屋・道具納屋・大工・網大工・鍛治屋・飯焚・樽屋・桶屋・釜懸・番人・魚切（魚切親父・本切・中切）」が所属しており、さらにその下に「日雇頭・日雇人」⁽⁴⁰⁾がいたことが明らかになっている。

「大別当」は益富組の手代の中で最高位にあたり、納屋場の総支配人として二人一組で各々の組を管理していた。別当のほとんどが畠屋によって占められており、益富組運営の管理者として平戸藩内及び大村藩や五島藩など藩を越えて活動を行っていた。「若衆」は納屋場の中軸として山見番と納屋場間の伝達、加子・薪の不足の処理などの職務を担つており、「納屋人」と「手代」の二面性を有していた。

また、益富組の雇用地域は広範囲に渡つており、友押は生月島外の出身者（宇久島・小値賀島・壱岐・黄島出身）が多かった。その他備後国田島・鞆浦、周防国室積浦などからも労働者を雇用している。⁽⁴¹⁾

③益富組の生産・販売

鯨組の生産から販売までの流れは、運上銀の上納と資金調達、道具類の作成、

鯨の捕獲、解体・加工、販売に分けられる。

益富組は、大坂や下関などの問屋、あるいは小納屋から「先納銀」の形で資金を調達した。⁽⁴²⁾ここでいう「先納銀」とは、小納屋の場合、捕獲される鯨の部位（史料では「道具」と呼ばれる）に対し事前に支払われる資金であり、鯨が捕獲された後にその部位が「先納銀」を支払った側に供給される仕組みになっていた。また、その他にも平戸藩や鯨油販売先の藩から融資を受ける場合もあった。

鯨の捕獲の前には納屋場にある前作事場で「前細工（前作事）」と呼ばれる準備が行われ、船や鉛、網などの道具類の作成・修繕が行われた。捕鯨全般の道具に使用する網や綱の材料である苧を縫う作業は、御崎組の場合益富家の敷地内で生月壹部浦の婦女子が賃雇で動員された。その他鯨油や鯨肉を加工・保存するための桶や樽を作る桶屋も存在した。

鯨の捕獲の時期には「冬組」と「春組」があり、「冬組」は「小寒十日前より彼岸十日前まで」の下り鯨を、「春組」は「彼岸十日前より春土用明て後日許ほど」の上り鯨を捕獲した。⁽⁴³⁾益富組の漁場は、平戸藩領を越えて大村藩・五島藩・長州藩・対馬藩に至つており、複数の鯨組が冬・春両組あるいは片組を組み合わせて操業を行つていた。益富組が利用した漁場には、平戸藩領の生月島御崎浦・平戸島津吉浦・的山大島神浦・壱岐前浦（瀬戸浦）・同勝本浦・大村藩領の江島・蛎浦・平島、五島藩領の板部島（黄島）・黒瀬浦・宇久島、長州藩領の通浦・仙崎（瀬戸崎）浦、対馬藩領の廻浦などがあり、時代によつて変化した。

実際の鯨の捕獲は、まず「山見」が陸の高台にある施設（役職だけでなくこの施設自体も「山見」と呼ばれた）から鯨の存在を発見し船へ知らせるところから始まる。山見の指示によつて勢子船が漕ぎ出し、双海船が網を張る網代へ鯨を追い立てる。⁽⁴⁴⁾網にかかった鯨に向かつて、勢子船から綱がついた鉛を何本も突き、勢子船を引きずらせる形で鯨を疲労させる。さらに「剣」と呼ばれる道具を何度も鯨に突き刺し、鯨を弱らせた後に羽指が海に飛び込んで鯨の背上に乗り、包丁で鼻切を行つて鯨に網をかけ、鯨が沈まないように持双船に繋ぎとめる。最終

双船とそれを曳航する勢子船によつて納屋場まで運ばれた。こうした一連の捕獲作業は厳寒の海で行われ、その様子は司馬江漢の『西遊日記』に詳細に記録されている⁽⁴⁵⁾。

捕獲された鯨は先述の通り納屋場で解体・加工された。『勇魚取絵詞』が描かれた天保期の御崎組の大納屋は、表間口が七間（約二三メートル）、奥行きが二四間半（約四四メートル）もあつたと記されている。なお、御崎組の納屋場には「納屋場の守り神」として信仰された「岬神社」があり、現在も石祠が伝存している⁽⁴⁶⁾。

鯨商品の販売には、「浜売り」と呼ばれる現地での鯨肉販売と、「積出し」と呼ばれる他領の問屋を経由した販売の二種類があつた。また、販売とは別に現地の人々や納屋の労働者らが鯨肉を隠して持ち帰る行為も行われており、「カングラ（間太郎）」と呼ばれていた。先述の通り、益富組は、大坂や長崎のみならず下関・熊本・福岡などに鯨商品の販路を持つていたが、その中でも特に福岡藩と益富組の関係について、次章において詳述したい。

3 益富組と福岡藩

（1）福岡藩の鯨油需要

益富組は、福岡藩と非常に深い関わりを持っていた。それは鯨油の流通によって特に顕著に表れている。稻の虫害である「蝗災」を防ぐために鯨油を用いる技術は、既に享保期以前から少しづつ福岡藩の農民へ伝播していた。その最中に福岡藩では、享保一七〇一八年の飢饉が起り、甚大な被害が発生した。そのため、稻を守るために鯨油は福岡藩にとって一層欠くことのできない必需品となつた。益富組の鯨油販売は、こうした事情を抱える福岡藩の鯨油需要を満たした。先述の藤本氏の研究によれば、益富組と福岡藩との具体的な取引交渉の様子は以下の通りである⁽⁴⁷⁾。

鯨油は、福岡藩の郡役所から益富組へ発注された。この時の注文書に鯨油樽の

大きさと数量・廻着港名・受取人が明記されており、福岡藩側の廻着港は福岡城下永蔵の他、姪浜・奈多・博多・津屋崎・若屋などであった。鯨油の価格は変動があるため、注文を受けた益富組によつて価格の検討が行われた。価格と支払い方法が決定すると、鯨油は福岡藩内の各港まで移送された後、藩内各村の農民へ割り渡される仕組みとなつていた。

（2）博多鰯町石蔵屋と益富組の関係

益富組は、博多鰯町（現、福岡市博多区須崎町）で相物問屋を営んでいた石蔵屋と主に取引を行つていた⁽⁴⁸⁾。益富組と石蔵屋との関係を示す一事例として、宝暦期の藩による銀切手政策をめぐる石蔵屋利左衛門と益富又左衛門とのやりとりが益富資料から明らかになっている。石蔵屋利左衛門は、宝暦六年（一七五六）に「御用聞町人」となり、宝暦七年に福岡藩が財政窮乏の打開策として計画した銀切手政策の「銀切手引替所」の引請人となつた。この銀切手政策は失敗に終わり、切手を引き受けた町人側にとつては負担を強いられるものとなつた。そこで石蔵屋利左衛門は、銀切手三〇〇貫目の償却に関する藩との交渉に益富又左衛門を巻き込み、福岡藩家臣の借銀の交渉と絡めて交渉を有利に運び、最終的には一〇か年の運上銀を切手で上納するという願いを藩に聞き届けさせることに成功している。その運上銀は益富組から納品される鯨商品に課せられた投請運上銀であった。

また、安永年間に鰯町と古溪町の問屋間で相物と生魚の取り扱いをめぐる争論が発生した際、益富又左衛門が鰯町の要求が通るように福岡藩へ願書を提出している⁽⁴⁹⁾。この件でも福岡藩における益富組の影響力の大きさと、鰯町問屋との結びつきを窺い知ることができる。

なお、福岡藩及び石蔵屋との取引において欠かせない人物が、先述した豊屋勢右衛門である。豊屋勢右衛門は、益富組の別当として福岡藩や石蔵屋との「パイプ役」を果たしていた⁽⁵⁰⁾。

(3) 福岡藩による益富組の優遇政策

このように、藩にとつて必需品である鯨油を取り扱う益富組と、その取引先である石藏屋の意向を福岡藩は無視することはできなかつた。福岡藩は益富組を優遇する政策をとつてゐる。それを顕著に表すのが、安永九年（一七八〇）一月に、⁽⁵²⁾ 福岡藩から益富又左衛門へ拾人扶持が与えられたことである。また福岡藩は、組主の益富又左衛門だけでなく手代である賀屋勢右衛門に対する優遇も行つていた。益富又左衛門が拾人扶持を与えた折に、勢右衛門も福岡藩から「年々白銀拾枚」を下賜されている。

福岡藩は鯨油の安定的な確保のために、益富組の保護を目的とする貸付も行つてゐた。文化年間には、鰐町運上銀の内から無利息で毎年二五貫目が一〇年間貸し付けられており、嘉永六年には金二千両もの大金が貸し付けられている。⁽⁵³⁾ これらの貸付は福岡藩の町役所が行つており、福岡藩において商人から徴収された運上銀が、益富組の鯨油廻着の資金として使用されていた。これらの貸付の事実からも、福岡藩にとって益富組がいかに重要な位置を占めていたかが分かる。

その他捕鯨業以外として、白山宮の普請に関わる資料（「白山宮御宝殿作事方帳」（資料番号六四七、天保九年）など）、屋敷の普請に関わる資料（「重家棟揚一切帳」（資料番号五五八、嘉永元年）・「重家修理作事帳」（資料番号五七九、安政三年）など）、新田開発関係（「佐世保新田方一件取合之極」（資料番号八四、文化一年）など）、伊勢講関係（「御伊勢講出会帳」（資料番号七一、弘化四年）など）などを確認することができる。

4 公開資料の目録編成について

以上の研究成果を踏まえ、今回公開する益富資料の資料群としての内的秩序の再構成を試みた。⁽⁵⁴⁾ 本来であれば資料群の目録編成は、その資料群が成立した組織体による構造分析を行うことが原則である。しかし先述の通り、益富組がいかなる組織構造で成り立つていては議論のあるところであり、今後の研究成果によつて資料群の目録編成も異なる様相を呈するものと考えられる。よつて本稿では、先行して公開した一三五五点について、内容による分類と作成者である組織体の組み合わせによる仮の目録編成を行うこととした。

益富資料の内容分類で最も大きな枠組みとなるのは「捕鯨関係」である。つまり、大項目としては「捕鯨関係」と「捕鯨関係以外」の二つに大別される。「捕鯨関係以外」の中には、先行研究で明らかにされている鮪網に関わる資料

群がある。まず、宝暦二年に作成された「鮪網代納銀目録」（資料番号三〇四）を確認することができる。その他、「年々鮪網御運上銀相納帳」（資料番号三七、天明七年）・「鮪網代運上銀納帳」（資料番号二六五、弘化三年）などが伝存している。また、明治期の鮪網に関する資料も伝存しており、明治八年段階で益富又之助が長崎県令へ宛てた鮪網代の継続を願う「嘆願書控」（資料番号四五四）がある。鮪網の他に、明治期の鯨販売に関わる資料も伝存している。「鯨壳出書抜帳」（資料番号五七一、明治二年）・「鯨積出改帳」（資料番号五七一、明治二年）などがあり、その作成の組織体は「弘益商店」であることが分かる。

続いて、「捕鯨関係」の資料群について、主に資料の作成者にあたる「作成組織体」に着目して伝存状況を確認したい。「捕鯨関係」の資料群を構成する組織体の階層構造上、まずは益富組全体の經營に関する資料が最も上位に位置づけられ、その下位に個別の漁場の操業に関する資料が連なることになる。今回公開した資料群の中で、作成組織体として出漁先漁場の地名を付けた益富組麾下の組の資料の残存状況を見ると、御崎組を始めとして、前日（瀬戸）組・勝本組・津吉組・大島組・黄島組・黒瀬組・宇久島組・江島組・蛎浦組の各組の資料を確認することができる。⁽⁵⁵⁾

さらに、各組の下位の階層には、「大納屋」など、それぞれの組に所属した組織体を位置付けることができる。例えば、「御崎組大納屋」や「前日組勘定納屋」などがそれに当たる。以下、この階層の目録編成について、その代表的な事例を挙げたい。

第一に、作成組織体が各組の「大納屋」である資料がある。今回公開した資料

群の中で、作成組織体に「大納屋」の文言があるものを抽出すると一六三点になる。各藩や取引先との交渉の様子が分かる「案詞帳」は、組織体としては、御崎組大納屋（「案詞帳」資料番号六七、明治一年）の他、勝本組大納屋（「一一番案詞帳」資料番号三三三、天保四年）など、各組の大納屋単位で作成しているものが伝存していることが分かる。同じく作成組織体が大納屋である資料には、漁獲期の日誌である「大漁日録」があげられる。例えば、勝本組大納屋（「一番大漁日録」資料番号三〇、天保九年）、江嶋組大納屋（「大漁日録」資料番号二八、天保一〇年）など、特に天保期に作成された日誌を確認することができる。その他、「鯨道具代算用帳」（資料番号一四、天保七年、江島組大納屋）、「銀諸色勘定目録」（資料番号五九、天保一〇年、宇久島組大納屋）など、多くの資料が伝存している。

第一に、作成組織体が「前細工所」である資料が一〇点ある。「諸色勘定目録」（資料番号五五、天保五年）は「勝本組前細工所」、「釘請払帳」（資料番号一一九、安政六年）は「御崎前細工所」となつており、以上二点は近世の作成だが、それ以外は全て明治期の作成になつていて。第三に、作成組織体が「勘定納屋」である資料が四点ある。例えば、「羽指割友押割」（資料番号四五、嘉永四年）の作成組織体は「前目組勘定納屋」となっている。「割」とは、先述の末田氏の研究によれば、「益富組の一生産期における労働力の編成に関する史料」であり、労働者の職種や名前、出身地などが記載された資料である。⁽⁵²⁾これらの「割」資料は「若衆割」「友押割」「羽指割」の他、これらが組み合わされた「羽指若衆割」「羽指友押割」「羽指若衆割」などがあるが、作成組織体が不明のものが多く、「勘定納屋」の作成が目録上明記されているのは今回公開された資料群の中では資料番号四五のみである。その他「勘定納屋」が作成組織体である資料には、「午冬未春諸色勘定目録」（資料番号三五八、安政六年、勝本組勘定納屋）、「已冬午春諸色勘定目録」（資料番号四〇六、安政五年、前目組勘定納屋）、「米請払帳」（資料番号八六二、年代不詳、勝本組勘定納屋）が伝来している。なお、作成は不詳ながら、勘定納屋に関わる資料としては、「勘定納屋諸品渡方記録」（資料番号二二三、文政一二年）も確認

することができる。

第四に、「筋納屋」を一点確認することができる。具体的には、「筋仕揚帳」（資料番号六四四、明治二年）及び「筋請并剥揚帖」（資料番号六四五、明治二年）の作成組織体が「御崎組筋納屋」となつていて。また、作成組織体は大納屋であるが、筋納屋へ宛てた「筋渡之通」（資料番号八一五、明治二年）が伝存している。以上の三点は全て明治二年の作成であるが、同じく御崎組大納屋から筋納屋へ宛てた「諸色之通」（資料番号二二八）が唯一安政六年の年代のものであることが確認できる。⁽⁵³⁾

以上をまとめると、この階層で特に「納屋」という文言がある資料としては、作成組織体が「大納屋」である資料が圧倒的に多く伝存していることが分かる。これは、益富資料が益富家に伝来した「家文書」という性格を有しており、なつかつ「大納屋」が益富組の組主である益富家を主体とした組織体であつたことに起因するものと考えられる。一方、今回公開した資料群のなかでは、作成組織体に「小納屋」は見られなかつた。唯一、資料の名称に「小納屋」が含まれる「子

冬小納屋道具代指引帳」（資料番号二八四一、寛政四年）が確認されるのみである。⁽⁵⁴⁾なお、作成組織体が「畠屋売場」である場合には各組の下位に位置づけられることはなく、「〇〇組畠屋売場」という表記は見当たらない。先述の通り、畠屋売場の位置づけに関しては研究史上の課題となつており、今後検討を要すると考えられる。今回公開した資料の中で作成組織体が「畠屋売場」である資料は一〇一点伝存している。例えば、先行研究で注目されている「算用帳」（資料番号六〇一、文化一〇年（算用帳の中では最も古いとされている））は、作成組織体は「畠屋元場」である。⁽⁵⁵⁾

その他、作成組織体が「益富組」とは異なる編成として、「平戸藩」を挙げることができる。具体的には、運上関係の資料は、「益富組」の組織体内部ではなく、平戸藩の御勝手方が作成組織体であることが明記されている。例えば、「丑冬より寅春迄勝本御崎鯨組御運上銀指引帳」（資料番号一〇六）など各組の運上銀差引帳が伝来している。また、同じく「益富組」とは異なる編成として「福岡

藩」も確認することができる。具体的には、「福岡藩郡役所」及び「町役所」などを作成組織体として挙げることができる。

そこで最後に、今回公開した資料の中でも特に福岡藩と関わる資料の一部について、作成組織体が「福岡藩」であるものに限らず詳述したい。年代が判明している資料の中で最も古いものは、寛政五年（一七九三）に作成された「惣御指引目録」（資料番号九〇九）である。同資料は、先述の石蔵屋に関わる資料が一括して在中している木箱の中に伝存していた。箱の表書には「石蔵屋利左衛門・惣御預り手形入」と記されており、年代は「文化二丙寅年八月改」、作成は「豊屋売場」となっている。在中資料（資料番号九〇五）⁽⁶⁰⁾（内、木箱に記された年代と同様の文化三年（一八〇六）に作成された資料は、「証文之事」（資料番号九一〇）・「惣御指引目録」（資料番号九一一）・「家屋舗書出」（資料番号九〇五）である。まず、「証文之事」（資料番号九一〇）は、石蔵屋利左衛門から益富又左衛門へ宛てて出された証文であり、石蔵屋と益富組との取引残高を示している。「惣御指引目録」（資料番号九一二）は、「証文之事」に記載された残高に至るまでの取引を記した目録である。「家屋舗書出」（資料番号九〇五）は、石蔵屋利左衛門から豊屋売場へ出されたものであり、残高返済の保証として石蔵屋が所有する家屋敷が記載されている。先述の「惣御指引目録」（資料番号九〇九）は、文化三年より遡つて寛政五年に上記資料と同様に作成された取引記録である。同じ木箱の中には寛政一年の「家屋敷帳面」（資料番号九〇七）も在中している。同じく筑前関係ではあるが、年代は明治一〇年に作成されている「筑前問屋貸金」（資料番号九〇八）も同様の木箱に在中しており、享和から文化年間の石蔵屋利左衛門への貸付金が書き上げられている。このことから、明治一〇年以降に益富家において石蔵屋との取引及び貸付金について調査した際に、寛政期まで遡る石蔵屋との取引の記録が一括された可能性も考えられる。

その他、福岡藩の郡役所が発給した「覚」が多数伝存している。例えば、文政八年の鯨油注文書（「覚」資料番号九四〇一四一、「覚」資料番号九四〇一四三）、嘉永五年の鯨油納品に関する覚（「覚」資料番号九四一一一〇一一〇）などが

見られる。特に嘉永五年に関しては「筑前御用油一件控」（資料番号九一二）も伝存しており、嘉永五年段階における筑前郡役所・石蔵屋・益富組とのやりとりを知ることが出来る。

おわりに

本稿では、益富資料の解説として、主に研究史の整理を行い、なおかつこれまでの研究によつて明らかとなつている成果についても併せて整理を行つた。今回公開した資料の目録編成についても若干の考察を試みたが、益富資料は質量ともに一級資料であり、「捕鯨関係」の資料群だけに着目しても多岐に渡るため、その全ての目録編成について本稿で網羅することは困難である。特に各地の商人や「豊屋」などの個人名で作成されている資料に關しては保留とした。また、目録上では作成者が「不詳」のものも多数あるため、目録編成の内訳件数は本稿では確定しなかつた。今後の資料公開後に改めて目録編成を行つ際に内訳の数量を確定することとしたい。最終的には全ての資料の公開を終えた時点で、資料群構造の内的秩序の再検討を試みる必要があるだろう。古賀氏が指摘するように、研究が進めば、組織構造と経営行動に基づいた記録管理の在り方を復元することも可能となると考えられる。⁽⁶¹⁾

今後、益富資料は当館において順次公開する予定である。資料の公開がさらなる研究の発展の一助となれば幸いである。

※益富資料の整理・公開及び解説の執筆にあたつては、所有者益富恭子氏、平戸市生月町博物館・島の館学芸員中園成生氏、九州産業大学経済学部講師古賀康士氏より、種々ご高配を賜りました。ここに記して謝意を表します。

註

- (1) 当館マイクロフィルム収集資料。益富恭子氏所蔵。益富資料の一部は福岡大学にてマイクロフィルム化されており、同じく生月町の山県家に伝來した「山県家文書」のマイクロフィルムも福岡大学に所蔵されている。また、神奈川大学日本常民文化研究所及び国立研究開発法人水産研究・教育機構水産資源研究所図書資料館においても、同資料の一部が筆写稿本として所蔵されている（**漁業制度資料（筆写稿本）**所収「益富泊保家文書」）。
- (2) 秀村選二「幕末期西海捕鯨業における益富組労働組織の史料」（『産業経済研究』第三八巻第二号、一九九七）
- (3) 西和夫・山田由香里・吉池美奈「益富家住宅と捕鯨関連施設—生月島（長崎県）鯨組関連施設の調査研究その1」（『学術講演梗概集』F2分冊、日本建築学会、一〇〇四）、山田由香里・西和夫・吉池美奈「棟札・絵画史料などによる益富家住宅建設年代の検討—生月島（長崎県）鯨組関連施設の調査研究その2」（『学術講演梗概集』E2分冊、日本建築学会、一〇〇四）、山田由香里・西和夫・吉池美奈「生月（長崎県）鯨組益富家住宅の調査研究」（日本建築学会研究報告 九州支部3計画系）四三号、日本建築学会、一〇〇四）
- (4) URL <https://jmaps.ne.jp/fukuokakomonjo/> 令和四年三月現在。
- (5) 益富資料は、昭和三年（一九四八）に秀村選一氏の現地調査によって発見されて以来、様々な研究者によって資料調査が行われ、私家版「益富家文書目録」が作成された（資料の発見と調査の経緯については秀村選二「近世西海捕鯨業における鯨組の諸断面—益富組・中尾組について—」[九州文化史研究所紀要] 第五〇号、一〇〇七）を参照）。その後、虫損や湿損などの被害から資料を守るために、資料保存の観点から資料群は当館に預託されるに至った。そのため当館に預託される以前から行われていた資料調査による研究成果が蓄積されており、当館においてこれまでの研究成果を踏まえる形で益富資料の整理・調査を行ってきた。当館では、私家版「益富家文書目録」のデータを基礎として、さらに確認した新しい資料を含めて、資料の全面公開に向けた資料整理を継続している。
- (6) 註（2）秀村前掲論文。
- (7) 秀村選三「徳川期九州に於ける捕鯨業の労働関係」（一）（一）（九州大学『経済学研究』第一八巻第一・二号、一九五一）、同「近世西海捕鯨業に関する史料（一）—肥前国生月島益富家」所々組

- 方永代記」（『産業経済研究』第一六巻第四号、一九九六）、同「近世西海捕鯨業に関する史料（二）—肥前国生月島益富組『一番永代記』—」（『産業経済研究』第三七巻第一号、一九九六）、同「近世西海捕鯨業に関する史料（三）—肥前国生月島益富組『一番永代記』—」（『産業経済研究』第三七巻第一号、一九九六）、同「近世西海捕鯨業史料『前日定日写』—肥前国生月島益富組文書より—」（『産業経済研究』第三八巻第一号、一九九七）、同「幕末期西海捕鯨業における益富組労働組織の史料」（『産業経済研究』第三八巻第二号、一九九七）、同「近世西海捕鯨史料『五島黒鯨組定』」（久留米大学比較文化研究所紀要）第一八号、一九九六、同「近世西海捕鯨業における鯨組の諸断面—益富組・中尾組について—」（九州文化史研究所紀要）第五〇号、一〇〇七）。また、後述する藤本隆士氏との共著で、秀村選三・藤本隆士「西海捕鯨業」（江戸時代図誌）第一二巻西海道一、筑摩書房、一九七六）がある。
- (8) 秀村選三「近世西海捕鯨業における生月島益富組の創業」（久留米大学比較文化研究所紀要）第一九号、一九九七）
- (9) 小葉田淳「西海捕鯨業について」（『日本経済史の研究』思文閣出版、一九七八所収）、初出は京都大学平戸学術調査団代表小葉田淳編『平戸学術調査報告』（京都大学平戸学術調査団、一九五一）
- (10) 服部一馬「幕末期蝦夷地における捕鯨業の企図について」（横浜大学論叢）第五巻第一号、一九五三）
- (11) 牧川鷹之祐「西海捕鯨考」（筑紫女子学園短期大学紀要）第二号、一九六八）
- (12) 藤本隆士「近世西海捕鯨業史の研究 平戸藩生月島益富組を中心として—」（九州大学『経済学研究』第四四巻一二号、一九七八）、西日本文化協会編『福岡県史』通史編福岡藩（一）（福岡県、一〇〇一）四三一～四四九頁及び七七〇頁、藤本隆士「インタビュー 昭和と共に歩んだ人生（下）匁錢と益富家鯨組」（『福岡地方史研究』五六、一〇一八）、同『近世匁錢の研究』（吉川弘文館、一〇一四）、同『近世西海捕鯨業の中的展開 平戸藩鯨組主益富家の研究』（九州大学出版会、一〇一七）。なお、著書に収録されている初出論文については紙幅の関係上記載を省略した（以下同）。
- (13) 日本国内に多数伝存する捕鯨図説の一つとしての『勇魚取絵詞』に関する研究は、既に戦前から開始されているが、先述の牧川氏の研究を含めた歴史的詳細は註（12）藤本前掲書『近世西海捕鯨業の史的展開—平戸藩鯨組主益富家の研究』所収の「捕鯨図説『勇魚取絵詞』考」を参照さ

- れたい。なお、『日本庶民生活史料集成』（第一〇巻農山漁民生活、三二書房、一九七〇、一八二）
三三三頁）に翻刻が所収されており、桜田勝徳氏による解説が付されている。
- (14) 武野要子「壱岐捕鯨業の研究 益富組小納屋の分析」（『福岡大学創立二十五周年記念論文集
商学編』、一九六九）。さらに武野氏は、「前日勝本鯨組水統鑑」（長崎県立長崎図書館郷土課所蔵
山口文庫所収）の翻刻も行っている（武野要子「史料『前日勝本鯨組水統鑑』」（福岡大学「商学論叢」
第四卷第一号、一九七九）。
- (15) 鳥巢京一『西海捕鯨業史の研究』（九州大学出版会、一九九三）、同『西海捕鯨の史的研究』（九州
大学出版会、一九九九）。鳥巢氏は藤本氏が分析した益富組と福岡藩との関係にも着目し、益富組
と博多商人石藏屋・由岐屋及び藩儒龜井家との関係について言及すると共に、『勇魚取絵詞』出版
について研究史によりながらその経緯を整理している。また、鳥巢氏は先述の服部氏の研究を受け
て、益富組と蝦夷捕鯨計画との関わりについても言及している（鳥巢京一「江戸後期蝦夷地にお
ける捕鯨開拓」（福岡大学「商学論叢」第四三卷第三号、一九九九）。なお、益富家と龜井家の
関係については、庄野寿人「大儒 龜井昭陽伝（十、十三～十五）」（能古博物館だより）第三
号、第二二号～二八号所収、一九九五～一九九六においても言及されている。
- (16) 松下志朗「西海捕鯨業における運上銀について—平戸藩領生月島益富組を中心に—」（『福岡大学
創立二十五周年記念論文集 人文編』、一九六九）
- (17) 末田智樹『藩際捕鯨業の展開—西海捕鯨と益富組』（御茶の水書房、一〇〇四）、同『近世西海捕
鯨業研究の現状と五島藩捕鯨業の地域性』（『立教大学日本学研究所年報』七号、一〇〇八）、同
「近世日本における捕鯨漁場の地域的集中の形成過程—西海捕鯨業地域の特殊性の分析—」（岡山
大学経済学系雑誌）第四〇巻第四号、二〇〇九）、同「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成
過程 益富又左衛門組の運上に関する史料紹介」（『神奈川大学国際常民文化研究機構年報』三
号、二〇一二）、同「西海捕鯨業地域における益富又左衛門組の拡大過程」（神奈川大学「国際常
民文化研究叢書—日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究」第一巻、二〇一二）、
同「平戸藩領の捕鯨漁場における巨大鯨組の萌芽—天明初期益富組の鯨捕獲をかいま見る—」
（『民俗と歴史』第三二号、一〇一三）、同「近世日本捕鯨業地域史研究の現状と課題—歴史地理
学的手法による再構築」（『季刊地理学』六五（一）、一〇一三）、同「平戸藩領域における益富
又左衛門組の成長過程—安永九年鯨組運上史料一覧」（『中部大学人文学部研究論集』二〇号、
二〇一三）、同「寛政前期平戸藩領域における捕鯨業の一様相—益富大鳴組の運上史料から探
る」（『神奈川大学国際常民文化研究機構年報』四号、一〇一三）、同「寛政初中期平戸藩領益富
組の取扱鯨と運上銀」（『神奈川大学 国際常民文化研究機構年報』五号、一〇一五）、同「天明期
益富組の経営収支における捕獲鯨と漁場と運上銀の関係性」（『中部大学人文学部研究論集』三三
号、二〇一五）、同「書評と紹介 藤本隆士著『近世西海捕鯨業の史的展開—平戸藩鯨組主益富家
の研究』」（『日本歴史』（八四五）、一〇一八）、同「近世西日本近海における鯨組の出漁と漁場利
用の変化」（『歴史地理学』六一（一）号、一〇一九）。
- (18) 古賀康士氏は益富組に留まらず土肥組など幅広い対象を研究して「西海捕鯨業」の実態を明らか
にしており、分析対象が必ずしも益富組に限らない場合でも、益富組を含めた鯨組全体の組織編
成について考察している。古賀康士「西海捕鯨業における地域と金融—幕末期壱岐・鯨組小納屋
の会計分析を中心にして」（『九州大学総合研究博物館研究報告』八、一〇一〇）、同「西海捕鯨業に
おける鯨肉流通—幕末期壱岐小納屋の販売行動を中心にして」（『九州大学総合研究博物館研究報告』
九、一〇一）、同「西海捕鯨業における中小鯨組の経営と組織—幕末期小値賀島大坂屋を中心にして
—」（『九州大学総合研究博物館研究報告』一〇、一〇一一）、同「鯨資料室 調査報告 地域産業と
しての長州捕鯨—長門市くじら資料館所蔵文書からみえるもの—」（『地域共創センター年報』六、
二〇一三）、同「壱岐勝本浦土肥組の捕鯨文書について—土肥組文書の概要と関係史料の紹介—」
（『平戸市生月町博物館・島の館だより』一八、一〇一四）、同「鯨組の記録管理—西海捕鯨業の事
例から—」（『地域史料研究会・福岡 研究会会報』二二号（通巻第一四号、一〇一五）、同「書評
藤本隆士著『近世久錢の研究』」（『経済史研究』一九、二〇一六）、同「西海捕鯨業における巨大
鯨組の経営と組織 壱岐勝本浦土肥組を中心にして」（『地域漁業研究』五六（一）、一〇一六）、同「書
評 森弘子・宮崎克則著『鯨取りの社会史—シーボルトや江戸の学者たちが見た日本捕鯨』」（『九
州史学』一七八号、一〇一八）、同「西海捕鯨業における漁場秩序と地域社会—五島列島黒潮瀬を
めぐる争論を事例にして」（『九州史学』第一八三号、一〇一九）、同「肥前国小川島捕鯨の関係史料
料—九州大学経済学部古文書より—」（『九州文化史研究所紀要』六四、一〇一一）。
- (19) 資料の詳細については註(18) 古賀論文「西海捕鯨業における地域と金融—幕末期壱岐・鯨組小
納屋の会計分析を中心にして」八五頁を参照されたい。
- (20) 中園成生『くじら取りの系譜』（長崎新聞社、一〇〇一、改訂版一〇〇六）、同「日本における捕

- 鯨法と、捕鯨の歴史的展開の体系的研究についての考察」（平戸市生月町博物館・島の館だより）五、一〇〇一）、同「大島捕鯨の概要」（平戸市生月町博物館・島の館だより）一一、一〇〇八）、「平戸市で学ぶ日本の捕鯨の歴史」（平戸市生月町博物館・島の館だより）一二、一〇〇九）
- (21) 中園成生・安永浩『鯨取り絵物語』（弦書房、二〇〇九）
- (22) 森弘子・宮崎克則『鯨取りの社会史——シーボルトや江戸の学者たちが見た日本捕鯨』（花乱社、二〇一六）
- (23) 森弘子・宮崎克則「西南学院大学博物館寄託『松澤善裕氏所蔵文書』に見る鯨組と地域漁業の軌跡——平戸藩生月島の『御崎大納屋』から大島（的山大島）への書状——」（西南学院大学博物館研究紀要）第二号、二〇一四）
- (24) 註(18) 古賀前掲論文「西海捕鯨業における漁場秩序と地域社会——五島列島黒潮瀬をめぐる争論」を事例にして」参照。
- (25) 中園成生編『令和一年度古式捕鯨シンポジウム事業報告書』（古式捕鯨シンポジウム実行委員会・一般財団法人日本鯨類研究所、二〇二一）
- (26) 益富家の家系図については、註(12) 藤本隆士前掲書『近世西海捕鯨業の歴史的展開——平戸藩鯨組主益富家の研究』二三・三四頁に詳細な分析があるため、そちらを参照されたい。
- (27) 「先祖山県氏系譜」資料番号一九五七、「益富屋兩家伝記」資料番号一九五八・一九五九、「先祖書控」資料番号一九五八を参照。
- (28) 註(8) 秀村論文「近世西海捕鯨業における生月島益富組の創業」所収。
- (29) 「先祖書控」には初代又左衛門正勝が五人扶持を賜った年代が「享保一五年」と書かれているが、文脈上享保一九年の誤記と判断した。また、同資料には、「享保一九年から延享四年までの間に大人扶持に加増されているはずだが年代は不明である」とも記されている。
- (30) 平戸藩への運上銀の詳細については、註(17) 末田前掲書及び前掲論文を参照されたい。
- (31) 註(17) 末田前掲書、福岡大学総合研究所『近世西海捕鯨業史料・山縣家文書』（福岡大学総合研究所資料叢書第8冊）、福岡大学研究推進部『近世西海捕鯨業史料・山縣家文書（一）』（福岡大学研究推進部資料叢書第9冊）、福岡大学研究推進部、二〇一九）。
- (32) 益富組の創業から幕末に至る鯨組経営の変遷については、註(8) 秀村前掲論文、註(16) 松下前掲論文、註(17) 末田前掲書等を参照。
- (33) 捕獲高の詳細は註(16) 松下論文一六頁の表を参照。
- (34) 註(25) 『令和一年度古式捕鯨シンポジウム事業報告書』末田報告
- (35) 註(25) 『令和一年度古式捕鯨シンポジウム事業報告書』古賀報告
- (36) 益富組を含めた鯨組の労働組織については註(7) 秀村前掲論文「徳川期九州に於ける捕鯨業の労働関係」において詳しく論じられている。益富組の組織構造をさらに詳しく図式化した研究には、註(15) 鳥巣前掲書「西海捕鯨の歴史的展開」二三七頁「鯨組主益富家の経営組織」、註(17) 末田前掲書一四八頁「益富組の組織構造」、及び註(18) 古賀前掲論文「西海捕鯨業における巨大鯨組の経営と組織——壱岐勝本浦土肥組を中心に」四五頁に益富組を含む「単一の鯨組の組織編成の概念」がある。
- (37) 註(17) 末田前掲書二一八頁によれば、羽指には「親父羽指——宿老——勢子——勢子持双——本持双——増羽指——双海附——增加加子」という職務による階層があったことが指摘されている。
- (38) 「経営共同体」としての小納屋の位置づけについては、益富家の指示系統が存在したかについて、末田氏と古賀氏の見解が相違している。末田氏は、壱岐などに見られる現地の人々が経営する小納屋であっても益富家の指示系統が存在したという見解を示している。一方古賀氏は、小納屋は組主が任命した支配人が経営することもあれば、鯨組から経営的に独立した別の事業体であることもあつたとしており、「西海の鯨組とは單一の組織体といつよりも、高い自律性と多様な編成原理からなる複数の内部組織の複合体だったものである」（註(18) 古賀前掲論文「西海捕鯨業における巨大鯨組の経営と組織——壱岐勝本浦土肥組を中心に」四五頁）という見解を示している。
- (39) 註(13) 前掲書『勇魚取絵詞』参照。なお、同じく『勇魚取絵詞』には御崎組の組織について「大別当一人・別当三人・若衆五〇人・帳役三人・魚切一八人・筋^コさき二人・飯焚一人・茶廻一人・支配人八人・骨油掛一人・番人七人・大工三人・鍛冶一人・桶屋一人・網太工一人・羽指二〇人・同見習三人・鯨船加子四四〇人、都て五百八十七人」と記されている。
- (40) 註(17) 末田前掲書一四八頁。末田氏は文化期以降幕末までの益富組の生産組織としての納屋場を「別当・若衆・納屋人・日雇」としている。
- (41) 末田氏は註(17) 前掲書一四五頁において、益富組の広範囲な雇用形態について「益富組における雇用地域の広さ」、そが、同組の巨大な生産組織の展開を象徴し、かつ藩領域を越えた藩際捕鯨

業の展開を根底から支えていた」と評価している。

(42) 小納屋は数人の共同出資により運営された。なお、鯨組の資金の流れに関しては、註(18)古賀前掲論文「西海捕鯨業における地域と金融—幕末期壱岐・鯨組小納屋の会計分析を中心にして」

八九頁に壱岐・小納屋を事例にした概念図があるためそちらを参照されたい。

(43) 註(13)前掲書『勇魚取絵詞』参照。

(44) 西海捕鯨の網組では、三組の網が使われたため、「三結（みむすび）組」と呼ばれた。規模によつては「三結組」の一組を合体した「六結組」となることなどもあった。註(2)中園成生・安永浩前掲書『鯨取り絵物語』八一頁参照。

(45) 『江漢西遊日記』(平凡社東洋文庫四六一、一九八六、一五)～一五二頁

(46) 註(20)中園前掲論文「平戸市で学ぶ日本の捕鯨の歴史」

(47) 註(12)藤本前掲書『近世西海捕鯨業の史的研究—平戸藩鯨組主益富家の研究』所収「西海捕鯨業経営と福岡藩」

(48) 『福岡県史 通史編』福岡藩(1)、西日本文化協会、一〇〇一)、註(15)鳥巣前掲書『西海捕鯨の史的研究』七一頁によれば、文政期段階では石藏屋の他に同じく博多鰯町の由岐屋や五島屋と益富組との取引関係が存在し、その後石藏屋に統一化されたことが記されている。

(49) 註(48)前掲書『福岡県史 通史編』四四一・四四二頁

(50) 註(12)藤本前掲書『近世西海捕鯨業の史的研究—平戸藩鯨組主益富家の研究』八二頁

(51) 註(17)末田前掲書一八七一九四頁

(52) 註(48)前掲書『福岡県史 通史編』四四三頁、「上ミ方・江戸・長崎御立入町人由来書 全

臘写版、出版者及び出版年不明、三五頁)、なお、益富又左衛門に行人扶持が与えられたことは、『慶心分限帳』でも傍証することができる。(黒田三藩分限帳)西日本図書館コンサルタント協云、一九七八、三五六六頁)。

(53) 註(12)藤本前掲書『近世西海捕鯨業の史的研究—平戸藩鯨組主益富家の研究』八八～八九頁

(54) 鯨組の記録管理については、古賀康士氏の先駆的な研究がある(註(18)古賀前掲論文「鯨組の記録管理—西海捕鯨業の事例から—」)。また、益富資料に伝來した帳簿組織に着目し、特に「算用帳」の伝存状況と益富組の経営がどのように関わっているかをアーカイブ論として論じた鳥巣氏の論稿もある(註(15)鳥巣前掲書『西海捕鯨の史的研究』所収「鯨組主益富家の経営」)。

(55) なお、対馬の廻組を作成組織とする資料を確認することはできないが、宛所に「廻り組」の文

言が見られる資料(「仕切状之事」資料番号九四〇一三一及び「覚」九四〇一三四)と、資料の名称(表題)に「対州廻組御墨附写シ」と記されている資料(資料番号四二九)を確認することができある。

(56) 註(17)末田前掲書一〇八頁

(57) 安政六年には御崎組大納屋から「道具納屋」へ宛てた資料(「米之通」資料番号一二五・「生酒之通」資料番号二三六・「諸色之通」資料番号二三一)や「油納屋」へ宛てた資料(「諸色之通」)[資料番号三九]もある。

(58) その他「納屋」の文言がある資料としては、資料の名称に「焚納屋」と記されている資料(「焚納屋一切請渡帳」資料番号六六九)、あるいは宛所に「廻り組御骨納屋」と記されている資料(「仕切状之事」資料番号九四〇一三一)がある。また、各組の下位に位置する組織体として「藏方」も六点(「日雇帳」資料番号一七七、「注文書出帳」資料番号五三二、「金請払控帳」資料番号六三四、「納屋解綱子日雇帳」資料番号七一九、「扶持方請払帳」資料番号七二〇、「納屋掛目録」資料番号九四三)確認することができ、そのうち五点が「黄島組藏方」で、安政六年に作成されている。

(59) 註(12)藤本前掲書『近世匁錢の研究』一二〇一～一四五頁及び註(15)鳥巣前掲書『西海捕鯨の史的研究』所収「鯨組主益富家の経営」。

(60) これらの資料については註(15)鳥巣前掲書『西海捕鯨の史的研究』「福岡藩の鯨商品取引」にて言及されており、同書九〇頁に資料番号九〇五・九〇七を引用した「石藏家屋敷一覧」が作成されている。なお資料番号九〇六(「書状」)については福岡に関わる資料ではなかつたため、ここでは説明を割愛した。

(61) 古賀氏は、註(18)古賀前掲論文「鯨組の記録管理—西海捕鯨業の事例から—」において、鯨組における組織構造と経営行動のあり方が記録管理システムに反映されることを指摘している。

